

ガンドウ洞遺跡 飯田城跡

平成2年度緊急調査概報

1991. 3

長野県飯田市教育委員会

ガンドウ洞遺跡 飯田城跡

平成2年度緊急調査概報

1991. 3

長野県飯田市教育委員会

序

近年、飯田市街地では店舗・事業所・住宅が過密化し、新規の建設は困難な状況にあります。またこれに伴い、主要幹線を中心に市街地で交通渋滞が慢性化してきており、その緩和を図る一般国道153号飯田バイパスをはじめとする幹線道路が整備されつつあります。この結果、市街地周辺での諸開発が急速に進行しつつあり、同時にこうした周辺地域の振興の一方で、市街地の活性化が叫ばれ、J R 東海飯田駅を中心とする再開発も進行しつつあります。

市街地ならびに周辺地域での諸開発の結果、文化財とくに埋蔵文化財をいかに保全するかが緊急の課題となっています。すでに知られているように、飯田市はその恵まれた環境と相まって、古来先人達が各所で生活を営み、その痕跡を大地にとどめています。これらは飯田・下伊那の歴史を明らかにする上で欠くべからざる財産であり、できるかぎり現在の姿で次代に伝えていくことが望ましいことですが、住民の福利厚生を考慮する時、諸開発も無理からぬところです。

開発と保存、両者の実現は極めて困難であり、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることが次善の策といえます。開発のうち、個人の住宅建設の場合、調査費用の負担を求めるることは実際困難であるので、昨年度より重要遺跡内でのこうした住宅建設に先立ち、国・県の補助を受け緊急調査を実施しています。

本年度の緊急発掘調査は、竜丘の塚原二子塚古墳に隣接するガンドウ洞遺跡及び飯田市追手町の飯田城跡出丸で実施しました。それぞれ古墳時代・近世を代表する重要遺跡であり、調査の結果は地域史解明の貴重な手振りとなりました。

最後に2か所の調査にあたり、調査に深いご理解とご協力をいただいた地権者ならびに隣接地の方々、現地調査に従事された発掘作業員の方々ほか関係各位に深甚なる感謝を申し述べ刊行の辞といたします。

平成3年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

例　　言

1. 本調査は重要遺跡内の住宅建設に先立ちその保護を図るため、国・県の補助を受け平成二年
度に実施したガンドウ洞遺跡ならびに飯田城跡緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は飯田市教育委員会の直営事業として、地権者をはじめ地元地区ほか多くの方々の
協力を得て実施した。
3. 本書は調査員全体で協議の上、小林正春が編集・執筆し、吉川 豊・馬場保之が補佐した。
4. 本調査の結果出土した遺物及び記録された図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田
市考古資料館で保管している。

本文目次

序

例言

目次

| | |
|-----------------|----|
| I ガンドウ洞遺跡 | 6 |
| 1. 経過 | 6 |
| 2. 調査組織 | 6 |
| 3. 調査の概要 | 10 |
| 4. まとめ | 11 |
| II 飯田城跡 | 12 |
| 1. 経過 | 12 |
| 2. 調査組織 | 12 |
| 3. 調査の概要 | 16 |
| 4. まとめ | 16 |

挿図目次

| | |
|--------------------------|----|
| 第1図 ガンドウ洞遺跡の位置 | 7 |
| 第2図 調査地点及び周辺遺跡位置図 | 8 |
| 第3図 遺構全体図 | 9 |
| 第4図 飯田城跡の位置 | 13 |
| 第5図 調査地点及び周辺調査地位置図 | 14 |
| 第6図 調査区全体図 | 15 |

図 版 目 次

| | | |
|------|--------------------|----|
| 図版1 | ガンドウ洞遺跡20号住居址 同カマド | 17 |
| 図版2 | カマド断面 遺物出土状態 | 18 |
| 図版3 | 遺物出土状態 | 19 |
| 図版4 | 21号住居址 遺物出土状態 | 20 |
| 図版5 | 遺物出土状態 | 21 |
| 図版6 | 22号住居址 遺物出土状態 | 22 |
| 図版7 | 遺物出土状態 | 23 |
| 図版8 | 遺物出土状態 | 24 |
| 図版9 | 重機作業風景 発掘作業風景 | 25 |
| 図版10 | 発掘作業風景 | 26 |
| 図版11 | 発掘作業風景 | 27 |
| 図版12 | 清掃作業 測量調査 | 28 |
| 図版13 | 現地見学会風景 | 29 |
| 図版14 | 坂田城跡調査区全景 堀石垣 | 30 |
| 図版15 | 重機作業風景 | 31 |
| 図版16 | 発掘作業風景 | 32 |

I ガンドウ洞遺跡

1. 経過

伊那谷は、中央アルプスと伊那山脈とにはさまれ、その中央を天竜川が流れる山間の地であり四季折々の風光明媚な自然環境に恵まれた地である。その象徴ともいえる天竜川は、様々な形で地域住民の生活にかかわっているが、東西の山脈からの降雨時における収水量はけたはずれのものであり、それによる水害も数え上げればきりがないほどである。

こうした水害多発地である川路・竜江・竜丘地区の天竜川に面した地区の将来的土地利用が検討される中で、天竜川氾濫原全域にわたる盛土計画が具体化した。その前段工事として、盛土を運搬する道路が竜丘桐林地区の古墳密集地の一画を通過することになった。その道路建設により今まで農用地としての土地利用に限られていた場所も別用途の開発が行なわれる結果を生じた。

今回の開発計画は、盛土運搬道路が建設される場所に隣接して居住用の住宅が建設されるものであり、当該地は古墳時代を中心とする遺物が多量に表面採集される場所で、かつ、西方の上位段丘上には当地方でも屈指の古墳密集地である塚原があり、工事前の発掘調査は是非必要であると判断された。

住宅の建築計画は、本ガンドウ洞遺跡のある段丘よりは一段下位の段丘面上に居住する飯田市時又1350番地今村博によるものであり、飯田市教育委員会では先述のとおり事前の発掘調査が必要との判断のもと、建築計画者今村博と協議の結果、平成3年2月16日より現地での調査に着手した。

2. 調査組織

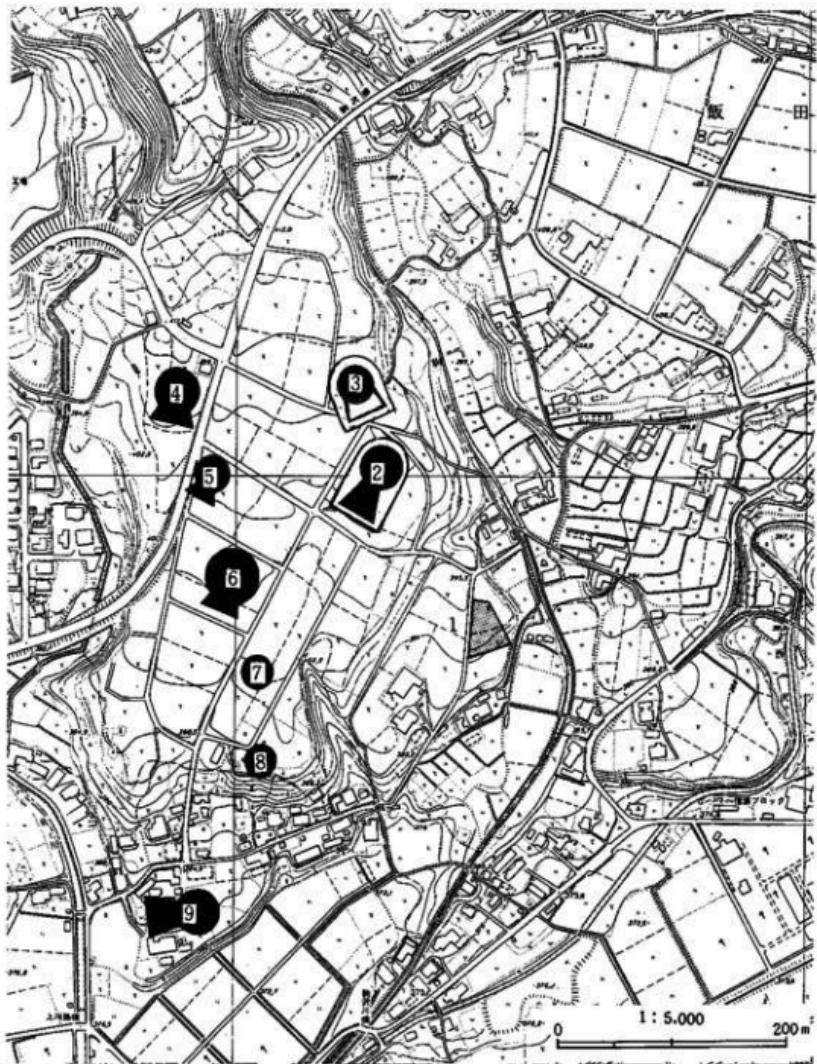
調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和、佐合英治、渋谷恵美子、吉川豊、馬場保之

作業員 木下傳、牧内修、松島卓夫、細田七郎、松下成司、清水三郎、松下真幸、矢沢博志、木下当一、塙沢登子、小沢さつき、林年雄、清水恒子、坂下やすみ、西尾俊貴、高木義治、中平隆雄、滝上正一、西尾茂人、森章、木下政利、田中正人、今村周巳、今村文勇、原田四郎八、今村春一、豊橋字一、塚原次郎、正木実重子、宇佐美せち、宇佐美郁、片桐千恵子、塙沢義男、木下和子、松下治子、坂井勇雄、小島孝修、池田美鈴、宮内真理子、吉川悦子、福沢育子、福沢幸子、牧内とし子、樋本宣子

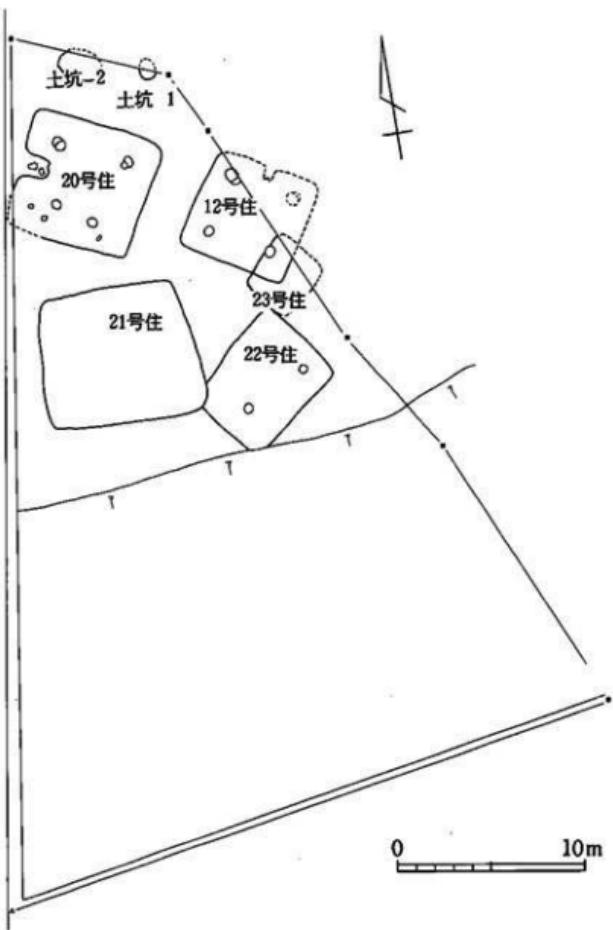


第1図 ガンドウ洞遺跡の位置



1. ガンドウ洞遺跡 2. 塚原二子塚原古墳 3. 内山塚古墳 4. 塚原3号古墳
6. 鏡塚古墳 7. 塚原11号古墳 8. 黄金塚古墳 9. 金山二子塚古墳

第2図 調査地点及び周辺遺跡位置図



第3図 遺構全体図

事務局 飯田市教育委員会社会教育課
竹村隆彦（社会教育課長）
中井洋一（社会教育課文化係）
小林正春（社会教育課文化係）
吉川 豊（社会教育課文化係）
馬場保之（社会教育課文化係）
篠田 恵（社会教育課文化係）

3. 調査の概要

調査地点は、当方屈指の古墳密集地である塚原の段丘より一段下位にあたる小規模な段丘面上である。調査前の状況としては、古墳時代の土師器片や石器などが多く分布しており、相当数の住居址が存在すると予想された。また、西方段丘上に分布する古墳群と直接関連する集落と考えられ、その調査結果からは、当方の古墳時代に新しい知見の得られることも予想された。

調査は、隣接地で建設される道路部分の調査に引き続き実施し、5軒の竪穴住居址とそれに関連する土坑2基を確認し、調査した。

これらの遺構は複数の時期にわたっており、弥生時代終末期から古墳時代後期にかけてのものである。

弥生時代終末期の遺構は、23号住居址で、一辺の長さが3m程と小規模な竪穴住居址である。当方の弥生時代後期における典型的な中島式土器の最終段階に位置付けられる壺・甕などが出土している。

続く時代の遺構としては、22号住居址であり、古式土師器の壺・甕などが出土しており、23号住居址に連続する時代の4世紀前半に属すると考えられる。

21号住居址は、5世紀代に位置付けられるもので、多量の土師器が出土しており、その整理結果により具体的な時期の決定はなされるべきであるが、本住居址を含む該期遺構群が上段に分布する古墳群と直接結びつくものといえる。

12・20号住居址は、今回の調査範囲内で確認された住居址としては最も新しいもので、いずれも6世紀の前半段階に位置付けられる。これらも上段塚原古墳群の最終段階と強く結びつく遺構といえる。

出土遺物については、それぞれの遺構内から、その所属時期を特徴づける土器・石器類が出土している。特に、古墳時代の土師器類の出土量は、かなりの数である。

なお、調査前の表面採集による遺物の分布状況から、今回の宅地建設にかかる全体範囲内に住居址等の存在が予想されたが、調査の結果南側部分の1m程の段差で低くなった範囲は、かつて瓦用の粘土を採取した場所であり、住居址等の遺構検出は皆無であった。

4. まとめ

今回の調査範囲は、宅地建設という限られたものではあったが、前述のとおり調査前に予想されたとおりの調査結果となった。また、隣接地で調査された道路敷部分の結果も合わせて検討する中で、本ガンドウ洞遺跡の具体的な姿を捉えることができる。

今回の調査で検出された遺構の時代は、4世紀に始まり、5世紀と6世紀の前半期にわたって連続した集落の姿を示している。調査範囲を含むガンドウ洞遺跡の面積は約10,000m²であり、今回の調査範囲内で検出された遺構分布状況が全体に及んでいると仮定すれば、全体で約300軒の住居址があり、古墳時代の一時期に同時存在した家の数は30～50軒程度と推測される。

仮に30軒の家で構成された集落が存在したとすれば、上段に築造された古墳に直接関与した人々が居住し、かつ周辺に所在したであろう他の集落間での主体的な役割を果したことにも十分に推測できる。

いずれにしても、上段の古墳群と本集落との関連を具体的に捉えることができれば、地域が一帯となった古墳時代の姿を現代において再現できるものであり、地域の古墳時代における重要な意味を持つ遺跡が本ガンドウ洞遺跡であるといえる。

一部は、今回の開発により消滅したわけではあるが、他の未開発部分については、今後、上段の古墳群とともに保存し、後世に伝え、地域における生の教材として活用される方途が講じられるならば、今回の開発による調査結果もまた生きたものとなるといえる。

II 飯田城跡

1. 経過

飯田市追手町2丁目675番地に居住する村上康彦・斎藤和人により、老朽化した木造住宅の改築計画がなされ、平成2年度に実施されることが具体的に決定された。当該地は、旧飯田藩の居城であった飯田城跡の一画にあたり、飯田市教育委員会では、工事着手前に発掘調査を実施する必要があると判断した。

飯田市教育委員会では、工事計画者と協議の結果、平成2年4月17日に現地での調査に着手した。

飯田城は、江戸時代飯田藩の京極氏・脇坂氏・堀氏の居城であり、飯田・下伊那地方の政経の中心地であった。現在は大半が市街地となり、わずかに本丸にあたる長姫神社の境内及び段丘斜面の空堀跡に城跡の存在をうかがえるのみである。

飯田城に関する資料は、昭和22年に市街地の大半を焼失した飯田大火もあり、ごく限られたものしかなく、飯田城そのものの実態は不明な点が多い。

そうした状況下において、飯田城の姿を知る術は発堀調査に頼るしか無いわけであるが、それも市街地の住宅密集地という土地利用の中では、ほとんど調査実施は不可能といえ、わずかに昭和61年・62年に飯田市美術博物館建設に先立って行なわれた二の丸部分の発掘調査が唯一の例である。その調査では、中世の築城時と考えられる空堀・竪穴をはじめ、明治時代に廃城となった時までの様々な遺構や遺物が発見されている。

今回の調査は、老朽化した住宅の改築に先立って実施したものであるが、先述の飯田市美術博物館建設による発掘調査箇所に隣接し、残存する絵図等によれば、二の丸と出丸を区切る空堀の所在した位置にあたると判断された。

2. 調査組織

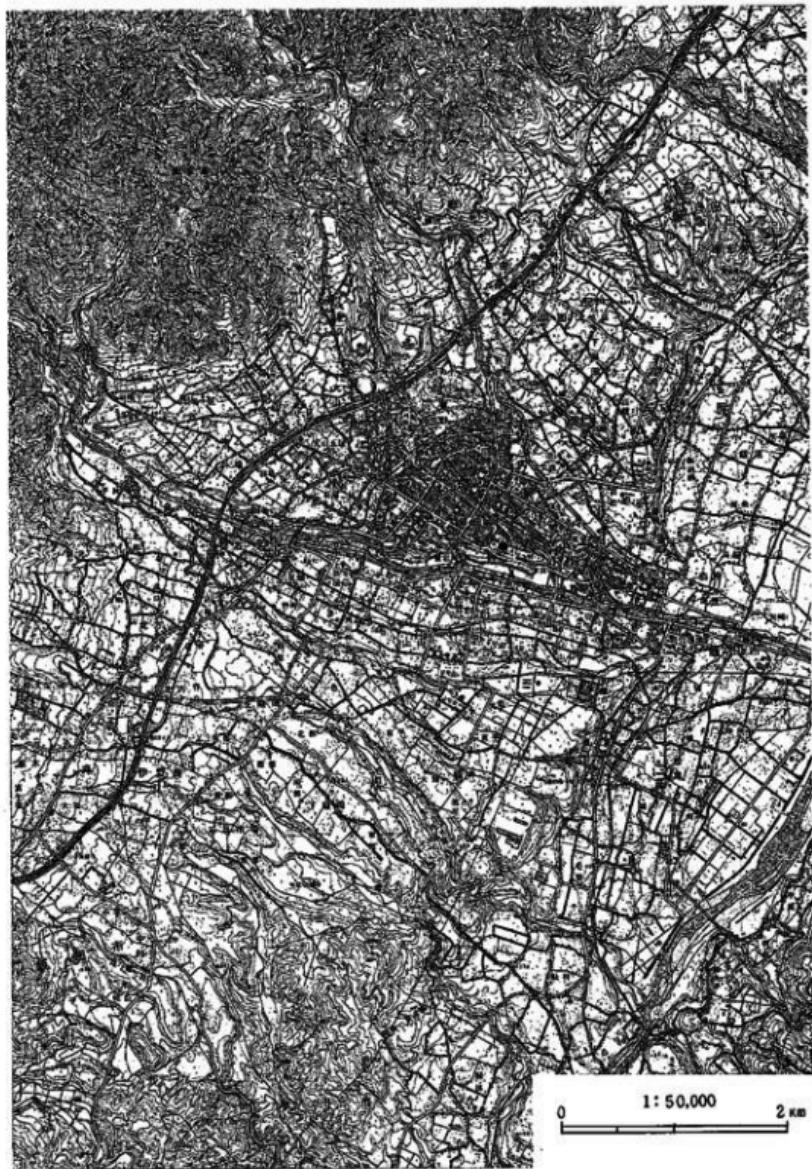
調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和、佐合英治、吉川豊、馬場保之

作業員 高木義治、森章、中平隆雄、松下直市、木下当一、高橋収二郎、木下傳、坂下やすあ

事務局 飯田市教育委員会社会教育課

竹村隆彦（社会教育課長）

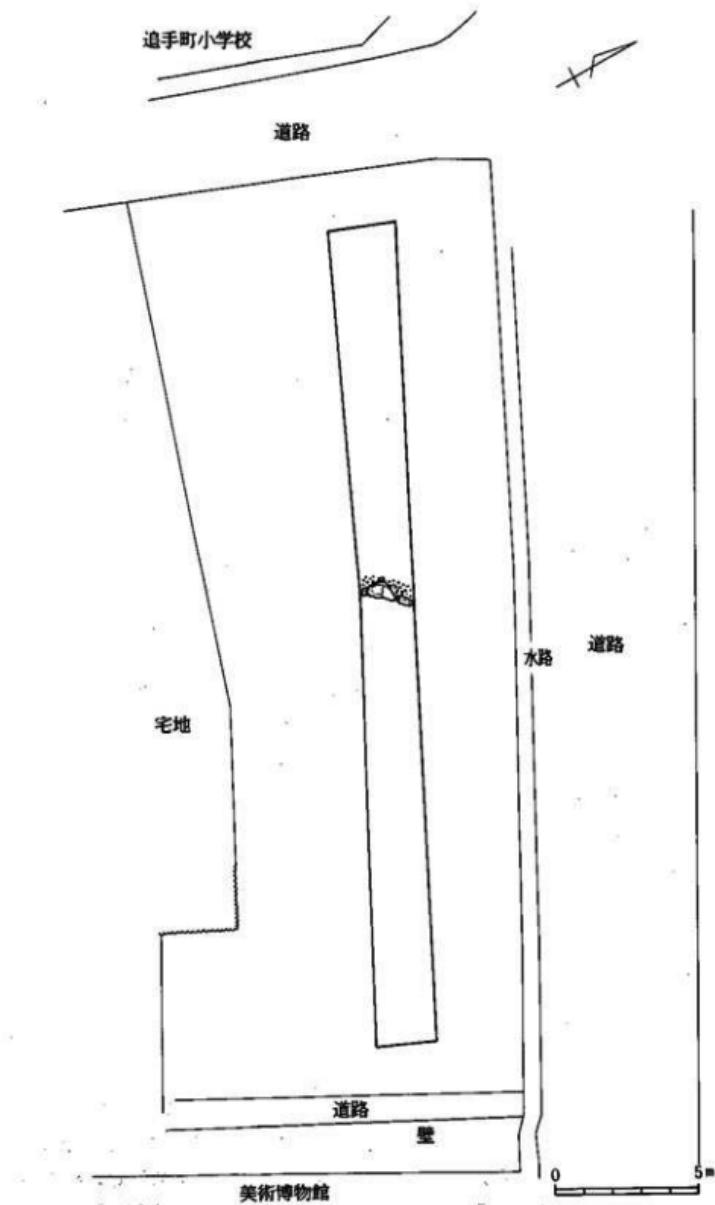


第4図 飯田城跡の位置



1. 今次調査地点 2. 昭和61年度調査地点 3. 昭和62年度調査地点

第5図 調査地点及び周辺調査地位置図



第6図 調査区全体図

中井洋一（社会教育課文化係長）
小林正春（社会教育課文化係）
吉川 留（社会教育課文化係）
馬場保之（社会教育課文化係）
篠田 恵（社会教育課文化係）

3. 調査の概要

調査地点は、市道と既存住宅に挟まれた狭小な場所であり、住宅建設地全体の調査は困難であり、その存在が予想された空堀の位置とその形態の把握を主眼としての調査となった。そのため市道に沿った東西方向に幅2mのトレンチを設定し、遺構の存在確認に努めた。

調査の結果、地表から50~100cmの厚さに焼土や礫・瓦などが埋められ昭和22年の大火時に大量の塵芥を処理した姿が確認された。

それらの焼土等を除去した結果は、調査地点のほぼ中央付近を境に大きな変化があることが確認された。西側半分は、黄色の砂疊層があり、それが地形を成す地山と判断された。中央部より東側は、黒色土が厚く、その状況は人為的に埋められたと判断された。その中央部分には径100~150cmの石がトレンチと直交して並んでおり、巨石を積んだ石垣と判断された。その方向は、絵図等にみられる空堀の方向と一致し、その面が東面することから空堀の出丸側石垣であることが判明した。二の丸側の石垣は、調査範囲内では確認できず、調査地点外の道路上に存在すると推測された。いずれにしても、この地点において空堀は完全に埋められており、その上に住宅が建設されていることが判明した。

住宅建設という土地利用のため、あまり深く掘り下げることはできず、石垣については、検出した最上段と2段目までを確認したのにとどめた。

出土遺物には、昭和22年の大火時に投棄された瓦礫の他はごくわずかであり、注目される物としては、窯道具であるサヤ鉢数点がある。先述の飯田市美術博物館建設時にも隣接地より同様遺物が出土しており、この空堀付近に飯田藩による官窯の存在した可能性がうかがえるものである。

4. まとめ

本調査は、300m程度の限られた範囲の一部分を調査したのみではあるが、絵図等にある空堀の存在を確認することができた。また、その形態も大きな石を積み上げたもので、段丘斜面の何箇所かで確認できる石垣の姿と共通するものであることも捉えられた。広大な飯田城の全容を現時点で把握することは極めて困難な状況ではあるが、先述の二の丸部分の発堀調査結果も含め、飯田城に関する新しい事実を知り得たといえる。



ガンドウ洞遺跡20号住居址

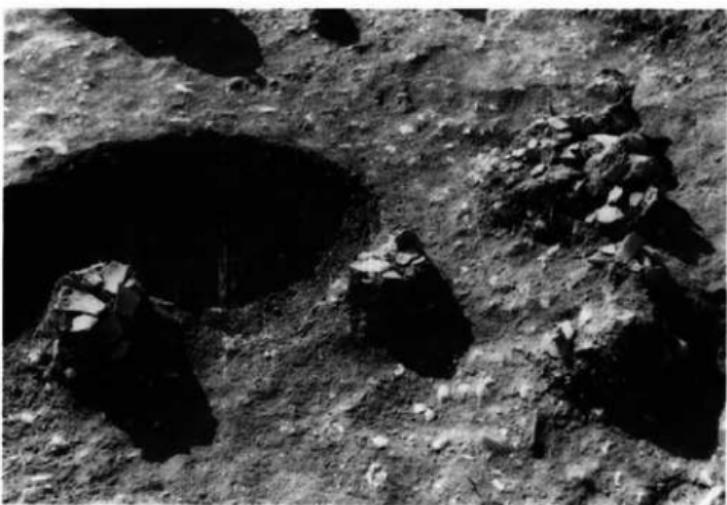


同カマド

図版 2



カマド断面



遺物出土状態

図版3



遺物出土状態



图版 4



21号住居址

遺物出土状態



図版 5



遺物出土状態



图版 6



22号住居址



遗物出土状态



遺物出土状態



同 上

図版 8



遺物出土状態



同 上



重機作業風景



発掘作業風景

図版10



発掘作業風景



同 上



発掘作業風景



同 上

図版12



清掃作業



測量調査



現地見学会風景



同 上

図版14



飯田城跡調査区全景（西から）



堀石垣（東から）



重機作業風景



同上

図版16



発掘作業風景



同上

ガンドウ洞遺跡
飯田城跡

平成2年度緊急調査概報

発行日 平成3年3月30日

発行者 飯田市教育委員会
長野県飯田市大久保町2534番地

印刷所 ヨシザワ印刷株式会社

